

第29号議案

「第3回平和を願う文京戦争展」の後援名義の使用承認について（継続審議）

上記の議案を提出する。

令和3年6月2日

提 出 者 文京区教育委員会

教 育 長 加藤 裕一

別記様式第1号 (第6条関係)

文京区教育委員会 共催・後援 名義使用申請書

2021年4月20日

文京区教育委員会 殿

申請者 (申請団体) 平和を願う文京区浄化実行委員会

住所 (所在地) 文京区本駒込5-15-12 小竹方

代表者名 小竹 紘子

代表者連絡先 03-3828-2949

下記事業を実施するに当たり、文京区教育委員会 共催・後援 名義を使用したく、申請します。

別紙 記

事業名		
共催又は後援名義等の使用を必要とする理由		
実施期間		
実施場所		
事業内容	目的	
	内容	
	対象者	
	参加費	
他団体の共催、後援等		日本中国友好協会・同東京都連合会
備考		

「平和を願う文京戦争展」 実施要綱・事業計画書

1、事業の目的

「平和を願う文京戦争展」は今年で3回目を迎えます。2019年第1回はマスコミにも取上げられ、1500人を超す方々が来場し、2020年の第2回はコロナ禍で500人の方の来場を得ました。

しかし、10～30代の若い世代はいずれも来場者の10%で、アンケートにも「戦争知らない若い人世代に見てもらいたい」との声が寄せられています。

展示を見た中学生は、日中戦争の実態をきちんと受止める感想をよせています。

展示する写真は、文京区真砂町生まれの村瀬守保氏が撮ったものです。

村瀬氏は戦場写真家ではなく、1937年(昭和12年)輜重兵として召集され中国大陸を2年半に渡って転戦、愛用のカメラを持ち、自分の所属する中隊全員の写真を撮ることで、非公式の写真班として認められ、3,000枚の戦場写真を撮影した人です。

村瀬氏の写真が広く国民に注目されたきっかけは、2012年村瀬氏の遺族が、遺品の写真約1,000枚分の保存と活用を、日中友好協会に依頼したことから始まります。

日中友好協会は日本兵たちの「人間的な日常」と兵士達が犯した異常的な加害行為などを、克明に記録した写真を通して、村瀬氏が伝えようとした「戦場の狂気が人間を野獣に変えてしまう」というメッセージを重んじて写真展示パネルに、作製しました。

この50枚の写真パネルからセレクトして展示し、戦争の日常と異常、高揚と陰鬱の対比、そして今年は東京大空襲の参考にしたといわれている重慶爆撃の写真と、東京大空襲の写真を見比べて戦争の被害と戦争悲劇を考へてもらうこと、話し合ってもらうことを目的としています。

また、日本が中国を侵略し戦火を広げ、更にアジア・太平洋戦争に拡大した結果、東京大空襲・沖縄の地上戦や広島・長崎の原爆被害へと拡大し、2,000万人に及ぶ中国・アジアの人達の犠牲、310万人の日本人の犠牲を生みました。

このように戦争は多くの一般市民が犠牲になります。二度と繰り返さないために戦争の加害と被害について、語り伝えていかなければならないと思います。

2、事業の計画

村瀬守保氏撮影の写真展、重慶爆撃事件写真、東京大空襲写真
証言 DVD の上映

事業予算書

事業名 相和五願三交戦争展

団体名 相和五願三交戦争展実行委員会

収 入 単位：円		支 出 単位：円	
賛同者団体・個人 の寄付	300,000	会場費	65,900
		パネル借用料	50,000
		送料	10,000
		プロジェクタ借用料	5,500
		宣伝費(チラシ等)	70,000
		資料等印刷費	10,000
		講演料	50,000
		予備費	28,500
		会費	10,000
計	300,000	計	300,000

2021年 月 日

(備考)

平和を願う文京戦争展実行委員会会則

(名称・事務所・連絡先)

第1条 本会は「平和を願う文京戦争展実行委員会」と称し、事務所は
東京都文京区本駒込 5-15-12 電話 03-3828-2949

(目的)

第2条 平和を願って戦争を二度と繰り返さないため、加害と被害の歴史を
伝える戦争展を実施することを目的とする

(活動内容)

第3条 前条の目的を達成するために、次の事業を行う

- ① 平和を願う文京戦争展を行う
- ② 目的遂行に関すること

(会員構成)

第4条 目的に賛同する文京区内労働組合、団体、個人で構成する

(役員)

第5条 役員は次の通りとする

実行委員長	副実行委員長	事務局長
会計	会計監査	

この会則は、2021年3月15日より

平和区願望戦争展実行委員会 名簿

役職	氏名	住所	電話
1 実行委員長	小竹 紘子	文京区本駒込 5-15-12	03-3828-2949
2 副実行委員長	鈴木 勝	越谷市大房 1006-3-8-905 文京区東 (文京区向 2-5-6 昭栄ビル) 03-6801-6259	
3 事務局長	植上 一夫	文京区本郷 2-18-8-401	3818-7258
4 会計	笠井 恭子	文京区白山 4-31-4-402	3811-4127
5 会計監査	有園 栄子	文京区千駄木 5-5-7	3827-5976
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			

事業実績

2019年に第1回目の「平和を願う文京戦争展」は、村瀬守保氏の写真展と文京の空襲の写真を展示し、証言DVDの上映、語り部の話を行いました。

マスコミで取上げられたこともあり、入場者は約1,500人超でした。

第2回2020年のコロナ禍で3日間500人の方々の来場を得ました。

元日本兵が中国での加害体験を語った、証言DVDの上映にも150人の人が見ました。

多くの方がアンケートを寄せています。

30才以下の来場者は、第1回目10%、2回目は20%となりましたが、戦争を知らない若い世代の来場は、今後の課題です、この面でも文京区や区教育委員会の後援を得て、働きかけを強められることを期待しています。

展示を見た人の感想文を添付します。

2020年平和を願う文京戦争展 感想文の一部

小学6年生

戦争の悲さんさがよく分かりました。

去年から心に残っていた試しぎりの写真は忘れられない。

中学生

写真の中で起きていることが、本当だとは思えませんでした。

記録をとった人も、とっててつらかったらと思うました。

中学生

父や姉からいろいろな戦争にまつわる話を聞いてきたけれど、聞くのと見て学ぶのとでは、まったくちがうと思いました。

聞いたこと見たことがなかったことを、もっとたくさん知れたので、友達や妹達にもおしえて、二度とこんな戦争がないようにしたいです。

中学生

こんなにも恐ろしい現実を写した写真があると知って驚きました。

この戦争展に来た人だけでなく、もっと沢山のの人に、この現実を見て知ってほしいと思いました。ありがとうございました。

中学生

漢字で読めない部分が少しあったが、写真で大体想像ができた。

当時はそれほど人の命が軽く見られていたのかを知り、日本人として恥づかしかった。罪のない人々を大勢殺してそれでも平然としていた人達がいたと言うことを知り、戦争は良くないと改めて学んだ。

中学生

中国の強制連行のDVDを見ましたが、とても激しい暴力を受けていたこと、とてもかこくな労働をさせられていたことを知り、とてもつらくなりました。

殺すのではなく暴力をふるうというのが、私にとってとてもつらいと感じたのではないかと感じました。一発で死んでしまう方が当時の人には、幸せだったのではとも思いました。もっと知っていけたらと思いました。

中学生

私の身内には戦争を経験した人がいますが、誰も戦争に話を避けています。

それほど辛く、苦しい出来事であると毎回実感します。今、学校で戦争について学んでいますが、心が苦しくなることばかりです。私は、戦争を知ることがとても重要だと思っています。これからも引き続き受継いでいきたいです。

中学生

残酷な写真も多くありましたが、中でもお正月の少しだけ楽しそうな雰囲気の写真もあって、戦場でもお正月を楽しんでいる様子がよくわかりました。

50代男性

目を背けてはいけない事実と、忘れてはいけない歴史を、風化させてはいけない。

50代女性

若い人達により多く見て感じて、心を動かしてほしいと願います。各中学校の巡回をしたら・・・と感じました。今年もありがとうございました。

60代女性

文京区出身の方が戦争を追い続け、写真に取り組み、残酷な写真も撮っていました。凄いことです。

漫画家の画はほのぼのしていますが、文章を読むと大変さがひしひし伝わりました。証言DVDを見ました。こういう真実に目を背けずしっかり見たかった。

区民や若者に平和について考えていただくためにも、今回の平和展に来てよかったです。目を背けたくなる日本軍の中国人にした蛮行は許されないものです。DVD①中国の裁判で元日本兵が老いて謝っている姿が、目に焼き付いています。

60代女性

今まで見たこともない写真ばかり、内部にいて日常的に写真を撮っていた人でないと撮れない場面ばかりで、苦しかった時も沢山あったことでしょう。

写真の下のコメント説明文がとても良く書かれていて、素晴らしかった。

60代

今でもさらに生々しくせまってくる歴史的事実を見ました。こんな展示会を子どもたちに見せてやりたいものです。

60代

戦争は人間を獣にしてしまう。誰が戦争するのか。人間が人間らしく生きていくために平和な社会を築いていきたい。

60代男性

村瀬さんが撮った写真は、従軍している中で3,000枚の写真を残していたというのは、大変意義のあることです。日本兵の人間的な日常が良く記録されていると思います。戦後も社長などを続けられて能力のある方だったのでしょう。このような戦争の真実を伝える活動を今後とも続けて下さい。

60代男性

部隊公認の村瀬氏が撮った写真は、紛れもない戦争の真実だろう。

「南京大虐殺はなかった」という言説を流す人達がいるが、村瀬さんの「南京虐殺」は確かにあったと言うことがわかる。「大」なのか「中」なのか「小」のかなど論じる意味はなかりょう。

60代男性

戦地で写真を焼き付けてまで作業をしたのは、大変だったろうなと思います。侵略の生の状況が写真に撮られていて、胸にせまってきます。

70代以上女性

南京虐殺が行われた写真は、とても残酷で戦争は人間を人間と思わず、二度と戦争はあってはならない。憲法9条を守ることを、つくづく思いました。

70代以上女性

貴重な写真が当時よく撮れたと思います。破棄されることなく残ったことはよかったです。写真は事実、南京大虐殺の事実がはっきり示されています。

70代以上

加害の実態を写真で知りたいと思っていましたので、村瀬さんの作品からむごい実像を見ることが出来ました。戦争がここまで人殺しを正当化することの恐ろしさを知ることが出来ました。

70代以上

加害の戦争の反省を込めた大切な展示企画でした。戦争できる国への道を止めるため、今後も企画を続けることを願っています。

70代以上

従軍慰安婦関係の写真に引き付けられました。展示の全部、江戸川から見に来て良かったと思いました。

漫画家の皆さんの反戦の思いが伝わってくる作品の数々、胸をうたれました。村瀬さんの写真が鮮明で、今後多くの人に見てもらいたいと思いました。

戦争の過ち、繰り返さないよう、がんばりたい。

70代以上

今の時期とても大切に思う企画ですね。日常と言ってもそこは戦地です。伝えること、伝え続けることの大切な写真です。戦後75年！重みですね！！

70代以上女性

昨年、真実を見たという衝撃が忘れられず、今年も村瀬さんの撮られた写真を見に来ました。証言DVDは、貴重な記録を辛い思いでみて衝撃でした。侵略戦争で日本軍が中国人にどんなことをしたか。加害の体験を語る人、虐殺、人体実験、強制連行、反戦思想の人への拷問、軍医や特高だった人の証言に至った葛藤も伝えていました。人間に思えない残酷なことをことを肝試しとって、天皇の命令としてやってしまったのですね。本当に悲しいことです。

文京・真砂生まれの 村瀬守保写真展

日本兵が撮った日中戦争



一人一人の兵士を見ると、
みんな普通の人間であり、
家庭では良きパパであり、
良き夫であるのです。
戦場の狂気が人間を野獣に
かえてしまうのです。

このような戦争を再び
許してはなりません。

村瀬守保

2020年 戦後75年 日中友好協会創立70周年 文京平和宣言40周年記念

第2回 平和を願う 文京戦争展・漫画展

入場無料

とき 8月10日(月) 13:00~18:00
8月11日(火) 10:00~18:00
8月12日(水) 10:00~16:00
ところ 文京シビック
アートサロン(展示室2)

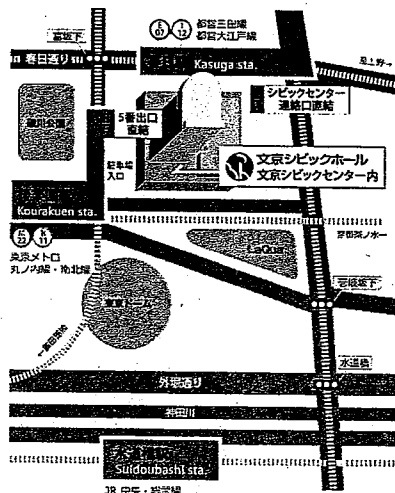


漫画家たちの満州引き揚げ証言

DVD
上映

予定

- 証言1 侵略戦争
- 証言2 中国人強制連行
- 証言3 20世紀からの遺言



○交通
東京メトロ後楽園駅・丸ノ内線(4・5番出口)
南北線(5番出口)徒歩1分
都営地下鉄春日駅三田線・大江戸線(文京シ
ビックセンター連絡口)徒歩1分
JR総武線水道橋駅(東口)徒歩9分

主催 「平和を願う文京戦争展」実行委員会

協賛 日中友好協会文京支部 / 日中友好協会東京都連 / 文京区労働組合協議会 / 文京区労働組合総連合 / 新日本婦人の会文京支部
東京保健生活協同組合 / 文京九条の会連絡会 / 東洋大学社研 / 文京革新懇

2年半にわたり中国各地で撮影し、 家族に送られた日本兵の日常

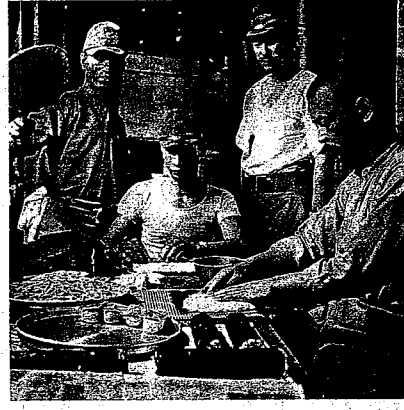
村瀬守保 (1909年～1988年) は1937年(昭和12年)7月に召集され、中国大陸を2年半にわたって転戦。カメラ2台を持ち、中隊全員の写真を撮ることで非公式の写真班として認められ、約3千枚の写真を撮影しました。

天津、北京、上海、南京、徐州、漢口、山西省、ハルビンと、中国各地を第一線部隊の後を追って転戦した村瀬さんの写真は、日本兵の人間的な日常を克明に記録しており、戦争の実相をリアルに伝える他に例を見ない貴重な写真となっています。

一方では、南京虐殺、「慰安所」など、けっして否定することのできない侵略の事実が映し出されています。

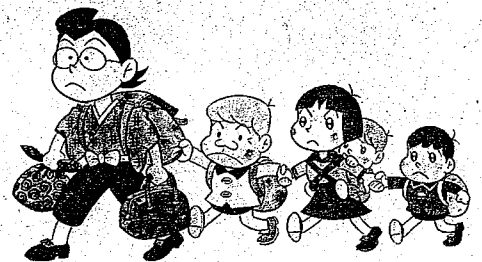
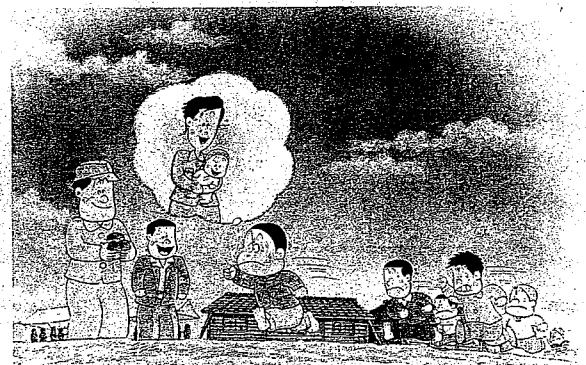
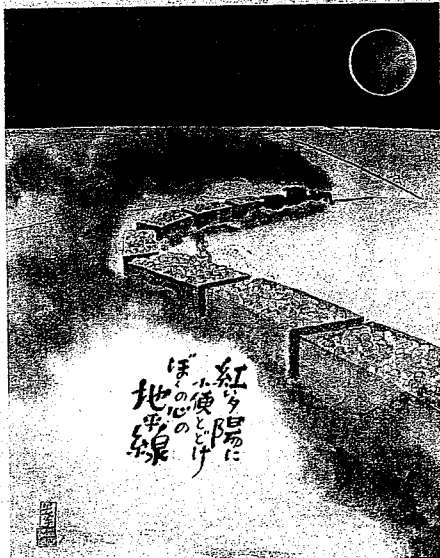
主な年表と村瀬守保さん略歴

1909年(明治42年)12月 文京区真砂町に生まれる
 1927年(昭和2年)7月 私立豊山中学校論旨退学
 以後 人夫、新聞配達員、商店員、テキヤ、
 船乗り、トラック運転手、タクシー運転手
 1931年(昭和6年)9月 柳条湖事件(満州事変)
 1932年(昭和7年)1月 第1次上海事変
 1937年(昭和12年)7月 盧溝橋事件
 召集 輜重兵 補充兵 二等兵
 同年8月 第2次上海事変
 同年12月 南京事件
 1939年(昭和14年)8月 ノモンハン事件
 1940年(昭和15年)1月 召集解除
 同年3月 会社員・(株)三田鉄工所 工場長、社長
 1945年(昭和20年)8月 敗戦
 (株)三田発動機、(株)共バン、アルプスミシン(株)、アルプス産業(株)社長
 その後
 埼玉設備工業(株) 社長
 全国商工団体連合会 常任理事
 埼玉県商工団体連合会 副会長など歴任
 1988年(昭和63年)7月 死去 78歳



中国からの 引揚げを体験した 漫画家たちの記録

赤塚不二夫、ちばてつや、古谷三敏、北見けんいち、森田拳次、高井研一郎、山口太一など中国から引き揚げてきた漫画家たちが、少年時代の忘れようとして忘れられない過去をまとめてマンガに描いた作品を展示しています。



「重慶爆撃」について

1937年7月7日、北京郊外で演習中の日本軍が中国軍と衝突した、盧溝橋事件により、「日中全面戦争」が開始されました。

「華北」から「華中」に戦火を広げる中で、日本の陸海軍航空隊の戦力は急速に強化されて行きました。その頂点が1938年に開始される「重慶爆撃」と言われています。

南京陥落後、国民党政府最高指導者の蒋介石は、臨時首都を四川省重慶に遷すと宣言し、1937年11月遷都。市の中心部に100万人以上の居を構えました。

1937年4月、スペイン内戦の際、フランコ側に味方したドイツ空軍が行ったゲルニカ空襲が、都市に対する大規模無差別爆撃の最初の事例となりました。

継続的な都市無差別爆撃は、中国政府・市民の戦意喪失をねらって、1938年～43年に実施されました。これが日本軍による重慶爆撃です。

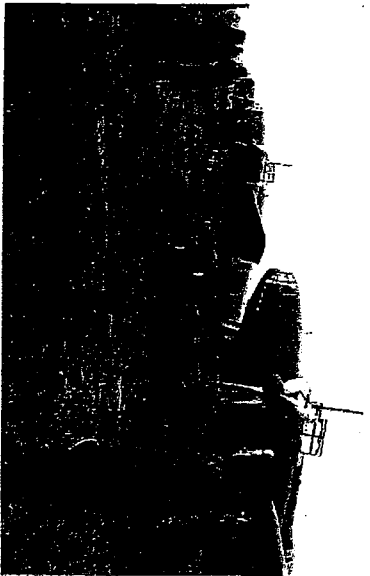
特に海軍航空隊が主力となった、1939年～41年は激しい無差別爆撃となり、195回の空襲により、1万人を超える死者と負傷者が出たとされています。

その後、第二次世界大戦の東京大空襲・原爆投下に至る無差別爆撃につながりました。

漢口基地と38年 12月重慶初爆撃



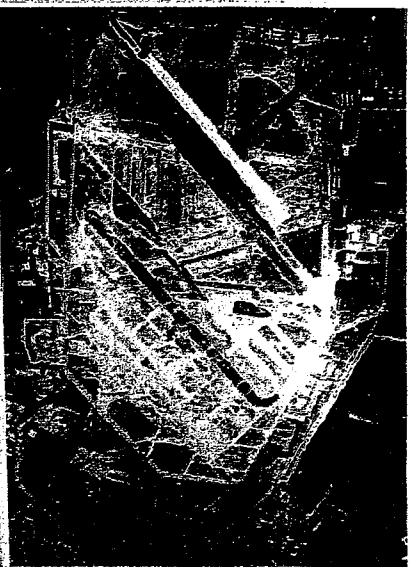
漢口から重慶まで800km。九七式戦闘機が爆弾500kgを投下
 できずと仕舞で返る相繼だった。哨艦機の援護に不可能で、
 自らの水砲で防衛し、爆撃を成功させられなかった。
 (『一億人の昭和史 日本のお戦史4 日中戦争2』252頁)



1938年12月26日午前10時半、九七式戦闘機12機で編成
 の飛行第60戦隊が漢口を後に重慶爆撃に出かけた。
 (『一億人の昭和史 日本のお戦史4 日中戦争2』252頁)



漢口基地の96人機：攻撃機
 (『皇國戦日本海軍航空隊』109頁)



漢口基地(1911年開港)の1940年5～9月：航空三三三基地(前)
 (『戦時空軍史』14頁)

一九三九年の重慶大爆撃

重慶の爆撃は、一九三九年の五月から九月にかけて、計九回行われた。この爆撃は、日本の航空隊が重慶の工業地帯を主要な目標として行った。爆撃機は、重慶の上空を飛行し、工場や倉庫、住宅地などを襲った。この爆撃は、重慶市民に大きな被害をもたらした。また、日本の航空隊は、重慶の防空体制を弱体化させることを目指していた。この爆撃は、日中戦争の重要な出来事の一つとして記憶されている。

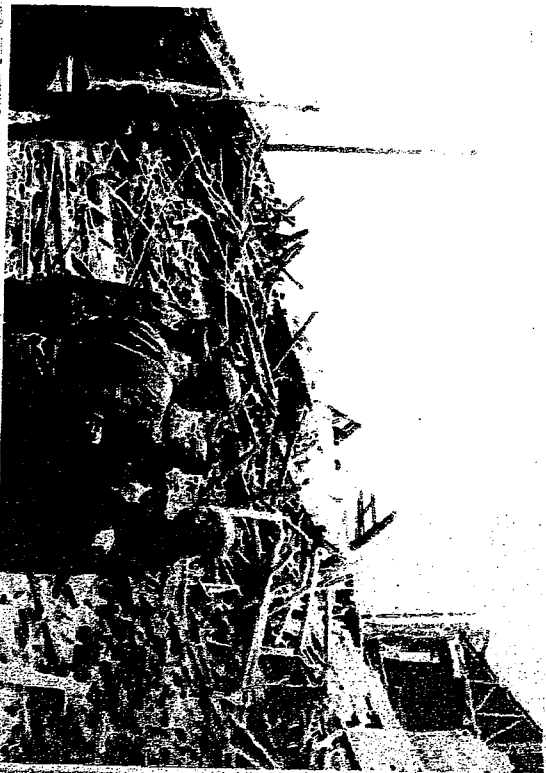
日付	機数	爆撃機	哨艦機	結果
五月一日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
五月五日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
五月九日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
五月十三日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
五月十七日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
五月二十一日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
五月二十五日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
五月二十九日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月二日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月六日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月十日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月十四日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月十八日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月二十二日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月二十六日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。
六月三十日	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	九七式戦闘機12機	漢口から重慶まで800kmを飛行し、爆弾500kgを投下した。

爆撃3年目を迎えた重慶市街

昼夜



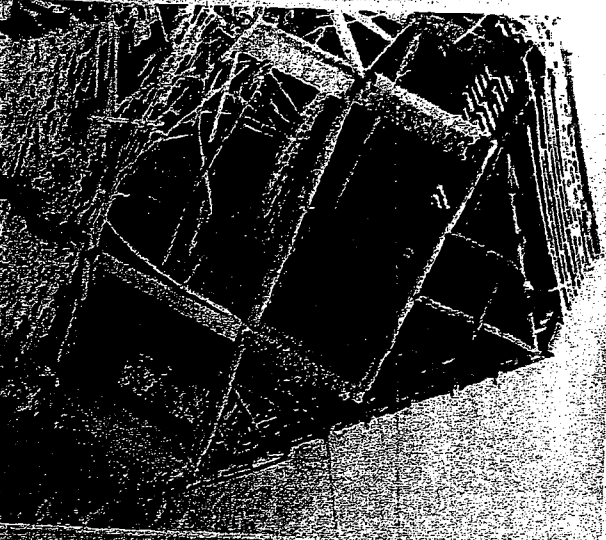
1941年8月10日 嘉陵江左岸(旧)市の住宅街は爆撃によって瓦礫となった (『英雄の城』127頁)



1941年5月16日 被害状況を視察する国民党政府 (『英雄の城』130頁)



1941年5月16日



1941年5月16日

1941年5月16日

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

1941年5月16日 重慶市街の爆撃被害状況 (『英雄の城』130頁)

第3回平和を願う文京戦争展の企画について

1937年から2年半従軍し、戦場現場で撮った村瀬氏の写真は、戦争の現実・真実を語っています。

1937年から15年間続いた日中戦争は、中国・アジア各地で戦火を広げました。

文京戦争展は、加害と被害の歴史を合わせて展示し、戦争について考え話し合ってもらう材料を提供してきました。

今年は、加害も被害も含めて、多面的に戦争について考える場として企画しました。

村瀬氏の写真はNo.1～40、No.50の写真を展示します。

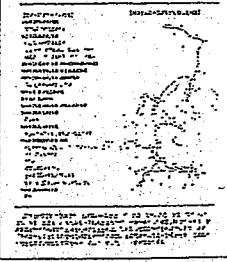
新たに、東京大空襲に通じる都市無差別爆撃と言われている重慶爆撃の写真(1938～1941)を展示し、東京大空襲の写真も並べて、戦争について多方面から考え、話し合う材料を、新しい取り組みとして計画しました。

特に、戦争を知らない世代に見て考えてもらいたいと企画しました。

戦争展実行委員会

一兵士が写した侵略戦争

村瀬守保(1909~1988)撮影写真



NO. 1 一兵士が写した侵略戦争

1937年(昭和12年)に召集され、日本軍の一兵士として、天津、北京、大連、上海、南京、徐州、漢口、青島、山西省、ハルビンなどを転戦するなかで、村瀬守保さんが撮影し続けた写真は、日本軍兵士たちの戦場での生活を記録するとともに、日本軍の侵略の実態を克明に伝えています。「平和を守ることが次の世代に対する私たちの責務」との村瀬さんの遺志を受け継ぎ、ご遺族から贈呈を受けた貴重な写真を展示パネルにしました。 日本中国友好協会



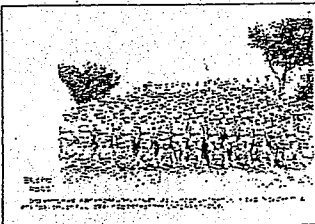
NO. 2 はじめに

私は13人兄弟の6男として、1909年(明治42年)12月に東京都文京区本郷で生まれました。1937年(昭和12年)7月、28歳の時に召集を受けて、中国大陆を2年半にわたって転戦し、さまざまな体験をして参りました。当時、私は戦争反対の意見をもっておりましたが、その事を他人に洩らすことはできませんでした。中国ではカメラ2台を持参して、中隊全員の写真を撮っていたので、中隊の非公式の写真班として認められ、約3000枚の写真を撮ることができたのです。現地ではシャッターをおすとき、できるだけ平静な気持ちで、人間らしい態度を失わないよう心がけました。



NO. 3 愛用のカメラ

15歳の時にカメラ「パーレット」を入手してから、60年以上も写し続けてきましたが、ただ夢中でシャッターを押すだけでしたから、腕前のほうはサッパリです。召集された時、できるだけ、かさばらないカメラをと「ベビーパール ヘキサ-4.5」を買って、胸のポケットに入れて出征しました。いつでも、どこでも、5秒もあればシャッターを押せるのです。上海に転戦した時、外人租界は無傷で、カメラショップもありましたから、二眼レフ1台と現像、焼き付け用品一式を買い入れました。



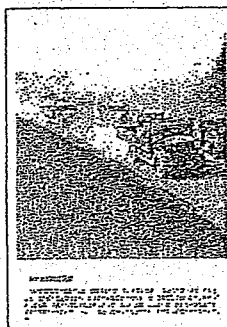
NO. 4 召集された将兵たち

兵站自動車第十七中隊は、中隊長・井上中尉以下200名の編成で、ほとんど召集された将兵だけでした。私は第二小隊に配属されて、田中少尉の当番兵を命じられました。行軍演習が富士の板妻哨舎で行われた時の全員集合の写真です。



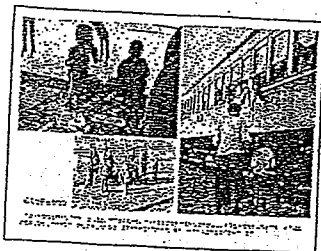
NO. 5 約3000枚の写真

行軍の間に、中隊長をはじめ、中隊じゅうの兵隊の写真を撮って、軍務の合間をみては、焼き付けをして、内地のご家族の方に送って頂きました。そのため、私が写真を撮ることは、軍務に支障のないかぎり、半ば公認となっていたのです。2年半の従軍期間中に、約3000枚も写したのでしょうか。



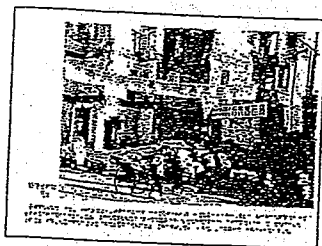
NO. 6 自動車部隊に配属

入営は1937年7月31日でした。部隊編成がすんで、車両を受領し、各自の所属が決められると、富士山麓方面へ2週間ばかり、部隊の行軍演習が行われました。8月18日に品川駅から宇品へ向かって出発。宇品からは貨物船に乗り込んで、釜山へ上陸。釜山からは、鉄道で一路北上です。初めて異国の土を踏んで、いよいよ敵地に向かったわけですが、別に何の感慨もわきませんでした。



NO.7 飢えた子どもたち

列車が国境線を越えて「満州」に入ると、物売りの母子が、わずかばかりの果物を売りに来ました。兵隊たちにだまし取られないようにと尻込みしながらの商売です。現地の子どもたちは、日本兵が捨てた残飯を拾い集め、がつがつとむさぼり食べています。



NO.8 破壊された天津

日本軍の爆撃で、めばしい建物はほとんど破壊された天津。所々に死体も転がり、夜になると人っ子一人通らず、崩れ果てた廃屋のかげに日本軍の歩哨の銃剣がきらめくのと、人間の死体をむさぼり食って毛並みの良くなった野犬の群れが、我が物顔にうろついているだけでした。街中には、爆撃した日本軍の手による「中国と日本の兄弟国は互いに共存共栄していくべきだ」とのスローガンが掲げられていました。



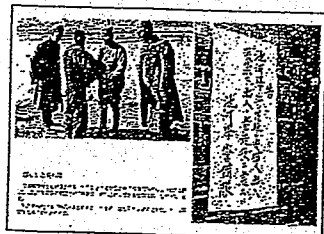
NO.9 舟を引く苦力

北京郊外の揚柳鎮。道路沿いの運河も、貨物や人間の、有力な輸送路になっています。下りは貨物を積んで自力で、帆を使って運航し、上りは空荷で苦力(クーリー・下層労働者)に引かせて運航していました。



NO.10 北京郊外の盧溝橋

1937年7月7日、たった一発の銃弾が盧溝橋事件を引き起し、やがて8年間にわたる日中戦争にまで拡大しました。日本軍の守備隊にたいして、現地の中国兵が襲ってきたのが事件の発端と言われていますが、当時現地の日本軍の中からも「日本軍が仕掛けたんだ」という声が聞こえていました。10月、中隊は天津を出発して北京郊外の豊台の兵舎に移動。豊台へ移ってから数日後には、盧溝橋を通過して南進し、保定、正定、石家荘にまで進出しました。保定城外の小高い丘の上立って、井上中隊長が敵情を偵察しています。



NO.11 怪しいと見れば

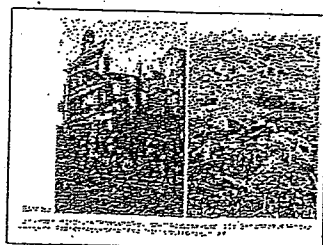
盧溝橋事件から約3か月後、北京から南進する途中の瑠璃河畔で怪しい住民を発見した臨時軍需品収集班の岩切中佐は、通訳に命じて厳重に取り調べを行っています。駅の警備地には「中国人は立ち入るべからず。立ち入れば銃殺にする」という日本軍の張り紙があります。



NO.12 見えたぞ! 上海

1937年11月19日、大連から上海への転進命令が出て、7千トン級の輸送船に乗船しました。船倉のずーっと下の方の船底にまで詰め込まれ、高さ4尺位に仕切られた、蚕棚のような所に、畳1枚当たり1人ずつ押し込まれました。それでも、お天気の良い日には、気のあった兵士たちが、上甲板で一杯飲みながらお国自慢の交換です。

船内生活が3日間続くと、昼ごろから海の色がまるで違ってきて、黄色くドロドロと濁りはじめ、波がずっと小さくなって来ました。やがて左右に、ほのぼのと岸が見えはじめました。上海です。



NO.13 死闘のあと

上海・大場鎮で、守りが堅かった中国軍の障地を攻め落とし、市内の警備に当たる海軍陸戦隊員。ここは、日本の上海派遣軍と中国軍の激戦が行われた所です。日本軍の猛攻に敗れた中国軍兵士の遺体は、野にさらされたまま白骨と化しています。



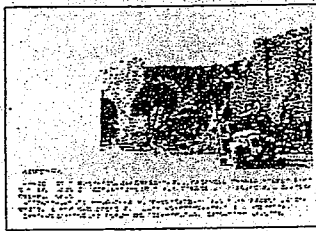
NO. 14 老婆の訴え

ある部落で昼食の大休止の時、逃げ遅れた老人と子供が、恐怖におののきながら部屋の奥に身をかくしているのが、見つかりました。子供にキャラメルをやろうとしましたが、手を出そうともしません。涙ながらに語る老婆の訴えを聞くと、80歳にもなる老婆がつかまって、2人の日本兵に犯され、けがをしたというのです。言うべき言葉もありませんでした。



NO. 15 若者の運命は

不敵な面魂の若者が、中国の便衣隊のスパイだ、と捕えられ憲兵隊に送られました。おそらくこの若者が生きてかえることはなかったでしょう。



NO. 16 首都南京へ突入

第一線に近づくにつれて、部落を通過するたびに虐殺死体が目立ち始めました。民家に踏み込むと、下半身裸の婦人が下腹部を切り裂かれて死んでいます。少し奥には、5～6歳の子どもがうつ伏せに死んでいました。奥の部屋にもう2人、老人が殺されていました。このような虐殺死体は随所に見られました。

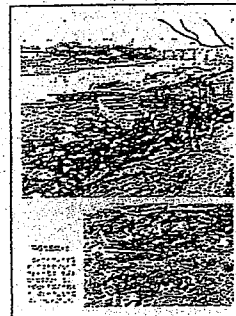
南京の攻略が大幅に遅れたので、第一線部隊の兵隊は、厳しい命令を受けて目が血走っていました。私たち輸送部隊はなぜか、2週間ばかり、城内に入ることを許されず、城外に足止めされていました。どこからともなく城内で大虐殺が行われている、という噂が流れてきました。

日本軍の砲爆撃によって突破口をあけられた中山門の城壁。ここから十六師団の将兵が、怒濤の如く南京市内へ突入したのです。



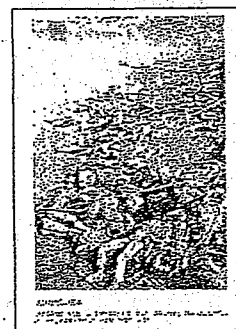
NO. 17 河岸いっぱい

ようやく足止めが解除されて、ある日、荷物受領に揚子江岸の、下関埠頭へ行きました。ずーっと、広い河岸がいっぱいに死体で埋まっているのです。岸の泥に埋まって、幅十メートル位はあろうか、と思われる死体の山でした。死体に油をかけて、焼こうとしたため、黒焦げになった死体も、数多くありました。



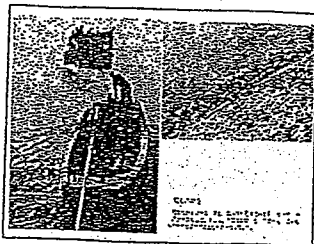
NO. 18 平服の民間人が

虐殺されたのち薪を積んで油をかけられて焼かれた死体。軍服を着た者はほとんどなく、大部分が平服の民間人で、婦人や子どもも混じっているようでした。



NO. 19 おびたしい死体

揚子江岸には、おびたしい死体が埋められていました。虐殺したあと、河岸へ運んだのでしょうか、それとも河岸へ連行してから虐殺したのでしょうか。



NO.20 死臭の中を

死臭で息もつけない中を、工兵隊が死体に鉤を引っ掛けて、沖へ流す作業をしていました。1回に数体ぐらいですから、こんなやり方では2カ月以上もかかりそうでした。



NO.21 駐屯地の生活

南京陥落後、郊外の滁県で駐屯中は、春のような日和が続きました。駐屯地では毎日食べることと、洗濯、兵器の手入れ、内地への手紙が仕事で、2か月ばかりのんびりと暮らしました。

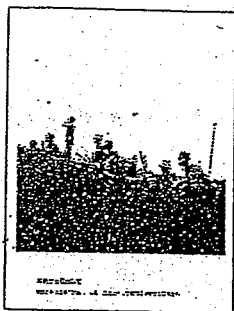
駐屯地に、待ちに待った内地からの郵便小包が到着しました。急いで分け分けて渡さなくてはなりません。



NO.22 待ち伏せ攻撃

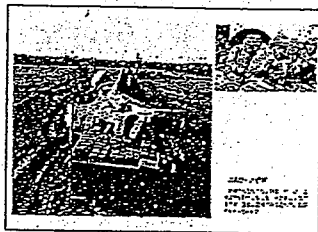
1938年2月、徐州作戦のため、わが第十七連隊にも北上命令が下りました。第一線部隊の十三師団直属です。徐州戦は平地での戦いで、随所で待ち伏せた敵と遭遇します。ある日、徐州付近の部落を通過中、いきなり左右の民家から一斉射撃を受けました。恐怖だけが先立ち、夢中で脱出することしか考えられませんでした。

車列中程のトラックが前輪を道わきの戦車壕に落とし、後続の十数輦が取り残されました。その後に集中攻撃を受け、散会して応戦、ようやく脱出はしたものの、十数名が死傷または行方不明となりました。



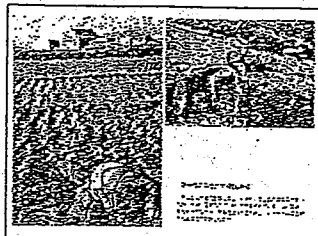
NO.23 敵襲から脱出して

敵襲からようやく脱出し、小高い丘に上がって敵情を偵察する隊員たち。



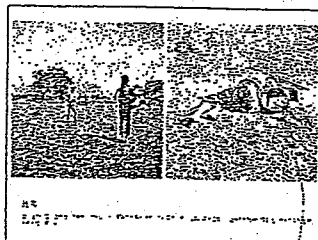
NO.24 のんびりと行軍

敵襲のおそれのない時は、のんびりと洗濯物を干かしながら、鼻歌まじりに行軍です。昼食は道端に座り込んで、飯盒飯をかつ込みます。



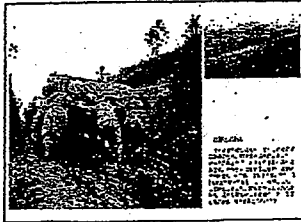
NO.25 第一線の兵士たち 試し斬り

駐屯した付近の部落に怪しい若者がいると引き立ててきましたが、翌朝、日本刀の試し斬りで惨殺されていました。左は、首を斬られながら、夜中に這って逃げ出し、50メートルほど離れたところで絶命した若者。



NO.26 銃殺

近くを歩いている物売りの年寄りが怪しいと、部隊の裏手へ連行した兵隊がいましたが、直後にズドンと一発の銃声が聞こえ、行ってみると老人が倒れていました。



NO. 27 悪路との闘い

徐州戦は失敗に終わり、さらに奥地の漢口攻略のため、部隊は西に移動しました。洪水の影響と大雨で道はものすごいぬかるみです。車輛が泥にはまると自力では脱出できません。結局頼りになるのは人力で、30人ほどでロープを引いたり、後押ししたりして脱出しました。服もズボンも全身泥まみれ、濡れた服を着たまま寝て、あくる日もそのまま、ぬかるみとの闘いです。



NO. 28 果てしない持久戦

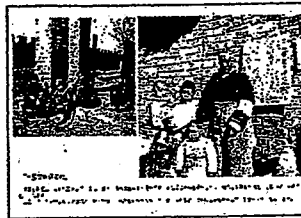
日本軍は漢口作戦に30万の兵力を投入しましたが、中国側の抵抗はすさまじく、日本側の死傷者も2万2千人を超え、果てしない持久戦に陥りました。

ある日、食糧徴発に出かけた兵隊が、夜になっても1人帰ってきません。翌朝、捜索隊が付近の部落を捜索しましたが見つからず、結局、このあたりでやられたんだろうと思われる部落を焼き払い、逃げ出す住民を銃殺してきた、というのが帰って来た捜索隊の報告でした。



NO. 29 戦場でお正月

お正月は、お酒も甘味品もたっぷり配給があります。一杯飲んで内地へ帰った気分でお国自慢の盆踊りに興じる兵隊たち。お正月くらいはきれいにしようぜ、と頭を刈りあう兵隊たち。ドラム缶でも、お正月の朝風呂となると、また格別です。



NO. 30 大日本軍保護村

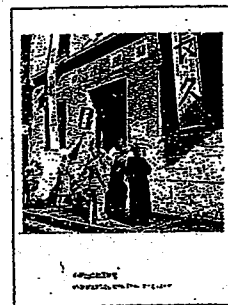
漢口を制圧し、治安が回復してくると、住民の保護は占領軍の任務です。みだりに物資を徴発したり、住民に危害を加えたりしないよう制札が立てられます。

どこへ行っても子どもたちは屈託がありません。残飯をもらったら、すぐ食べられるように茶碗と箸を用意しているちゃっかり者もいます。



NO. 31 検問所

市内の治安は日一日と平静に保たれてきました。要所要所には検問所が設けられ、身分証明書を提示させ、厳重に検査しています。



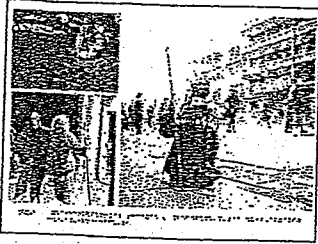
NO. 32 新聞社の戦況発表

報知新聞社漢口支社前で戦況発表に見入る将兵たち。



NO. 33 捕虜の使役

漢口の街ではたくさんの捕虜が使われていました。南京の大虐殺で世界中の非難を浴びた日本軍は、漢口では軍紀を厳重に保とうとして、捕虜の取り扱いには特に気をつけているようでした。捕虜の出身地はいろいろです。四川省、安徽省などほとんど全国から集められているようで、なかには広西省の学生も含まれていました。貴州の山奥に年老いた母と妻子を残してきたという男に、私はタバコを1箱やりました。



NO.34 物乞い

戦争で一番大きな被害を受けるのは、社会の底辺の人、とくに身体障害者ではないでしょうか。光を失った人が生きる道は、物乞い以外にどんな方法があるのでしょうか。



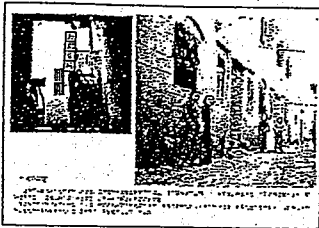
NO.35 軍直営の「慰安所」

南京戦では、日本軍の兵士たちによって数万の女性が強姦され、なかには12歳の少女まで輪姦されたという報告があります。兵士のセックス問題を解決する必要に迫られた軍司令部は、軍直属の慰安所と称する売春宿設置を決定しました。それにより日本軍の軍紀を保とうと考えたのです。慰安所の前で兵士たちは、そろそろ俺の番が来るぞと胸をときめかせて待ちました。第六慰安所「桜楼」には池田龍兵衛司令官名の「登楼者心得」が貼り出され、「サックは必ず使用し後は洗淨すべし」などの注意書きがありました。



NO.36 前線への移動

兵士たちの相手をさせられた「慰安婦」と言われる女性のほとんどは朝鮮人女性で、だまされて連れてこられたか、あるいは強制的に連行されたと言われます。戦局が進むにつれて、多くは屋根のないトラックで荷物同様に前線に運ばれていました。



NO.37 慰安所規定

兵站軍司令部の定めた慰安所の規定は、①慰安所外出証を所持すること、②入場券は下士官、兵、軍属は2円とする、③入場券に指定された部屋に入ること、④但し時間は30分とする、⑤用済みの際は直ちに退去する。

軍直属の慰安所にあきたらない兵隊は、裏町の私設慰安所を訪れます。不潔に満ちたあばら家の路地には、戦争で生きる術を失った女性たちが子どもたちや家族を養うために、日本軍の兵隊を相手にしていました。



NO.38 慰問団が来た

兵士たちの最大の楽しみは、日本からの慰問団です。有名歌手が来ると聞くと、100キロも離れた山奥から押しかけて、立錫の余地もありません。



NO.39 こんな奥地まで

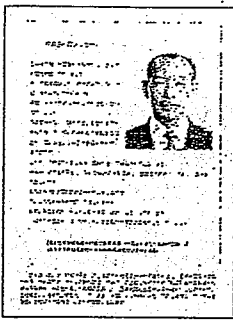
徐州のこんな奥地まで、「大日本国防婦人会」のたすきをかけた在留邦人が湯茶のサービスに出てきてくれています。



NO.40 道路が崩れて

道路が崩れて横倒しになった車は、荷物を下ろしてみんなで引き起こします。

NO. 50 村瀬さんのメッセージ



2年半の間、中国各地を駆け巡り、多くの戦闘に参加して参りました。
そして戦争の空しさ、悲惨さをひしひしと胸にきざみこんで参りました。

何故、人と人が殺し合わなければならないのでしょうか。

何の関係もない、婦人や子どもたちまでも含んだ住民を、何の意味もなく虐殺することが、国の為という一言で合理化されてしまうのです。

しかも、これに反対する者は、国賊だとして抹殺されてしまいます。

一人一人の兵士を見ると、みんな普通の人間であり、家庭では良きパパであり、良き夫であるのです。

戦場の狂気が人間を野獣にかえてしまうのです。

このような戦争を再び許してはなりません。

戦前の軍国主義が、今じわじわと復活、浸透しようとしております。

平和を守る事こそ、次の世代にたいする私たち国民の責務ではないでしょうか。

この写真パネルは、村瀬守保さんのご遺族から贈呈を受けた写真をもとに、日本中国友好協会が制作したものです。パネルの説明文は、村瀬さんの生前に発行された『私の従軍中国戦線—村瀬守保写真集（一兵士が写した戦場の記録）』（日本機関紙出版センター発行）に記述されている村瀬さんご自身の言葉を元にしてあります。写真パネル制作にあたってのご遺族ならびに関係者各位のご理解とご協力に、心から感謝申し上げます。